2023 年図書館書評コンテスト応募用紙　受付 No.0009

麗澤大学図書館

書　名	死にたくなったら電話して		
著　者	李龍徳	請求記号	９１３．６/R322

著者 のプロフィール・紹介

1976 年、埼玉県生まれ。在日韓国人三世。早稲田大学第一文学部卒業。「死にたくなったら電話して」で第 51 回文藝賞を受賞。

本の概要・要約

本作の舞台は大阪府の十三。そこにあるキャバクラにバイト仲間と訪れた徳山は、そこで出会ったキャバ嬢・初美から、携帯番号と謎のメッセージを渡される。そこには、「死にたくなったら電話して」と書かれており、初めは気にしていなかった徳山だが、初美の猛烈なアプローチによって徐々に心を許すようになる。そして、初美の信念に触れたことにより、徳山は初美に依存していくようになる。徳山は周りとの関係を遮断していき、最終的には二人だけの孤独な世界で幸せを感じる。

論評(この本を読んであなたが感じたこと、心に響いたこと、主張等)

私がこの本を読んで感じたことは、幸せを決めるのは誰かということです。世の中の小説、映画の多くが、ハッピーエンドではないでしょうか。しかし、それは物語の外にいる私たちが決めつけているだけにすぎません。これが、物語に対する意見だけであれば、問題はありません。しかし、現実世界でも同じようなことをする人は多くいます。学歴が高いほうが幸せになれる、結婚するほうが幸せだ、このようなことを言う人間に対して、初美に依存していた徳山は人間関係を壊すくらいに反抗します。その結果二人は外から見たら絶望にしか見えない状況でも、幸せを感じていました。私は幸せを決めるのは本人であり、外野が幸せの形を押し付けてはならないのだと感じました。

この本のおすすめポイント(どんな人にこの本を勧めたいか)

20 歳前後の人に薦めたいと思います。特に、一度でも死にたいと感じたことや、孤独を感じたことがある人です。初美の美しくも恐ろしい魔力を感じることができると思います。徳山が徐々に孤立していく様を描くリアルな描写は、ほかの作品ではあまり見ることができないと思いますし、自分の価値観に一つ、新たなものを得ることができると思います。